

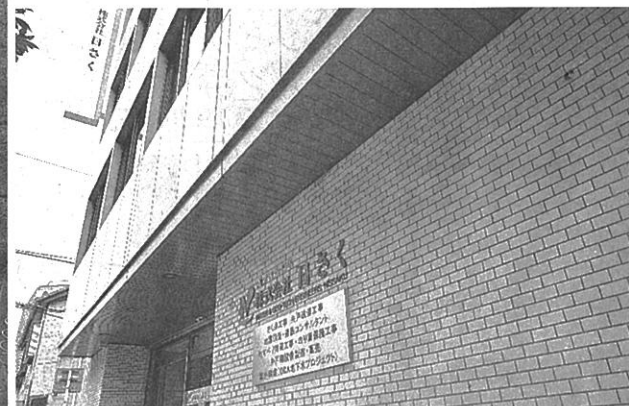
埼玉 BIZ

井戸掘り続け110年 技術は世界へ



さく井会社「日さく」(さいたま市)

さく井工事、井戸メンテナンス、地下水関連設備工事、地質調査など。本社・さいたま市。鴻巣市に工場がある。従業員数309人。2025年度の売上高63億2700万円、経常利益1億1900万円。



日さく本社ビル

日さく本社にある「防災井戸」から水を出す
若林直樹社長＝いずれもさいたま市大宮区

大地震が起きると、需要が急増する会社がさいたま市にある。明治45(1912)年に東京・丸の内創業した「日さく」。110年以上にわたり、各地で井戸を掘り続けているさく井会社だ。

「地震に強い」と評判に

需要が増えるようになった源流は、1923年にさかのぼる。関東大震災だ。マグニチュード7.9の揺れで、東京の水道管は軒並み甚大な被害を受けて断水。一方、井戸は壊れずに被災者の助けになった。「同社の井戸は地震に強い」と評判になり、24年には皇居吹上御所の井戸(深さ106㍍)も2本掘った。

阪神淡路大震災、東日本大震災、2年前の能登半島地震……。平成以降も大地震が起きるたび、企業や自治体から防災井戸の注文が増える。公園や学校など避難所への設置に熱心なのは、首都直下地震が想定される東京23区。力の弱い人でも操作しやすいハンドポンプ付きの井戸

が売れ筋だ。

就任11年の若林直樹社長(74)は「地震でトイレが使えなくなると、水を飲まない被災者が増えて災害関連死の恐れも出てくる。井戸は防止のためにも重要」と訴える。

日本初のエンジンで動く機械で13年に掘った最初の井戸は、現在の東京都新宿区にあった製氷工場の井戸だった。実態は「創業者の森村扇四郎が発明した日本製さく井機ではうまく掘れず、米国製を輸入して技術者にも来てもらい完成させた」そうだ。

追い風ばかりではなかった。高度経済成長期に井戸がたくさん掘られた工場地帯を中心に地盤沈下が深刻になり、各地の条例で採取が制限された。「会社がない」との危機感から地質調査や土木工事などへ事業の幅を広げてきた。

70年代からは海外に活路を見だし、政府の途上国援助(ODA)の地下水開発事業に参加。アフリカや中東・アジア、中南米など45カ国で給水施設を作っ

た。2023年度には功績が認められて、県から「埼玉グローバル賞」を受賞した。

長寿命化 目指すは50年

水道水の10～20%が地下水で、井戸と関わりが深い埼玉に本社を移したのは2003年。徐々に現場の作業や管理をする日本人の採用が難しくなり、19年から外国人社員の本格採用を始めた。試行錯誤を重ね、いまはベトナムやネパール、中国、ラオスなどの約20人が働く。日本で働いた元従業員がネパールで現地法人を立ち上げるなど、日本で学んだ井戸掘りの技術は世界に広がっている。「自社の利益も大事だが、日本で培われた技術を無駄にしないことも大切だ」と若林社長。

いまは、井戸の長寿命化に力を入れる。掘る技術やメンテナンスで、20～30年とされる寿命を50年に延ばすことを目指している。「これからも水とともに歩み続けます」

(日浦統)